

現代のことは

こはら
小原 克博



ハリケーン・カトリーナによって、ニューオーリンズを中心に大規模な犠牲者が出たのは二〇〇五年のことであった。ハリケーンのような自然災害は、避けがたく生じる「天災」であるだけでなく、事前の対策や事後の対応が悪ければ、被害を増大させる「人災」の要素も含んでいることを、この被災は世界に印象づけることになった。

それは被災の際のペットの保護である。ハリケーン・カトリーナの際にも、ペットと共に避難した人は多数いたが、避難先でペットの行き場がなく放置されたり、ペットと飼い主が離ればなれになってしまったり、様々な悲劇が生じた。大災害のただ中では人命救助が最優先であって、ペットのこ

動物からの問いかけ

牲を生じさせたことが、新聞などを通じて知られるようになり、人々の意識が変わり始めた。

特に、変化の大きなきっかけを作ったのがスノーボールと呼ばれた子犬であった。増水から逃れるため、人々はバスの上に乗るように誘導されたが、ペットの避難は許されず、警察官によつて子犬は飼い主の子どもから取り上げられた。子どもは「スノーボール！スノーボール！」と嘔吐するまで叫び続けたという。こうした出来事に心を痛めた人々や動物愛護団体が全米的な運動を展開した結果、〇六年、ブッシュ大統領が「ペットの避難と輸送に関する基本法」にサインするに至った。

緊急事態に対応できるよう制度を整えてきている。しかし、家族の一員ともいえるペットの救援に関しては、ほとんど未整備の状況ではなからうか。

他方、犬や猫をはじめ多くのペットが毎日、各地の動物愛護センターに持ち込まれている。この種のセンターは、引き取り手の見つからない動物たちを致死処分することを仕事の一部としているが、どのセンターの報告を見ても、処分件数が増加していることに驚かされる。人間の身勝手さが生む犠牲である。かつて、動物と人間の間には、力の不均衡に調整をもちたらずために様々な知恵が働いていた。動物が人間と会話を交わしたり、時には化かしたり、また結婚したりする昔話を思い出すこともできるだろう。特にアイヌ

には、動物を決して粗末に扱ってはならないことを教える物語があふれている。人間が動物を犠牲にしなければ生きていけないことに対する痛みと感謝をおぼえる回路を、かつては持っていたのだ。

大量の動物を家畜化し、痛みも感謝も感じることなくスーパーで動物の肉を買いあさる現代人は、人類史上、もつとも野蛮な段階にあるのかもしれない。人間が引き起こした地球温暖化の最初の犠牲になるのも動物たちである。我々は、物言えぬ動物たちの声を「聞く」力を回復しなければならぬのではないか。人が人であり得ているのかを測る大切な指標を、動物たちは与えてくれているのだから。

(同志社大教授・キリスト教思想)